2018
3/24 ㊏
13:30 ▶ 16:40
吹田市立千里市民センター大ホール

はなみど
はなとみどりの情報センター

吹田市

みどりのまちづくりシンポジウム

～公園をもっと楽しくする「しくみ」づくり～

「わたしのまちすいた」の **公園** を
もっと **すてき** に、もっと **楽しく** するにはどうしたらいいの…？

これからの公園の使い方について市民の皆さんと一緒に考えるためのシンポジウムを開催しました。
テーマは「公園をもっと楽しくする「しくみ」づくり」。
吹田市外の公園での取り組みなど、専門家からお話を伺いながら、
「わたしのまちすいた」の公園ではどんなことが出来るのかを一緒に考えました！

プログラム　Program

●挨拶
吹田市長　後藤圭二
●基調講演
「市民と公園がつくり出す都市の魅力」
大阪府立大学名誉教授 / 植物工場研究センター長　増田　昇 氏
●事例発表
①「市民協働による森のようちえん」
兵庫県立甲山森林公園所長 / ㈱日比谷アメニス　川端　美緒 氏
②「公園を育てる～神戸市東遊園地アーバンピクニック」
一般社団法人リバブルシティイニシアティブ代表理事
/ アーバンピクニック事務局長　村上　豪英 氏
●トークセッション「公園を楽しくする『仕組み』とは？」

【主催：吹田市花とみどりの情報センター】

基調講演

市民と公園がつくり出す都市の魅力

大阪府立大学・名誉教授
植物工場研究センター長　増田　昇氏

□　変革の動向（成熟型・環境共生型社会への転換）とみどり・都市公園の役割

人間と自然との関わりの歴史において、我々は『自然の征服』の時代から、『自然への生態学的適合』の時代に入ったと言えます。現在の成熟した社会における環境共生型都市づくりにおいては、その環境像のキーワードとして、●循環型社会をベースにした持続性の維持、●コンパクト化、●安全安心のまちづくり、●ストックの継承と蓄積、●地方分権、●生活主体の社会、●人間性の回復、●協働の視点、●マネジメント型社会、などが挙げられます。

このような背景の中で、みどりや公園の役割は何かというと、“都市そのものを支えるのがみどりである”ということです。すなわち、

①都市域のコンパクト化と同時に、都市とはそれだけで自立するものではなく、背景にある田園自然地域といかに一体的に保全するか
　・・・・・「集約型・低炭素型都市構造の実現」
②環境への負荷をどのように下げるか
　・・・・・「自然との共生を図った安全な都市や生活環境の実現」
③地域の歴史や文化に立脚した地域固有の美しい景観など
　・・・・・「都市や生活環境の魅力化」
④緑を活用したコミュニティの活性化や地域力の向上、あるいは新たなガーデンライフの創造等の・・・・・「新たなライフスタイルの実現」

であります。

今までの都市公園の主な役割は、緑やオープンスペースが存在することによる環境保全や生物多様性の確保といった「緑の存在効果」、そして運動やリフレッシュといった「健康レクリエーション」でした。これからはイベントやプログラム等による文化や交流、ヒーリングガーデン等の福祉活動、子どもの環境学習の場、都市間競争に勝つ商業や観光など、「みどりが持つ媒体効果」が公園の大きな役割となってきています。

□　吹田市みどりの基本計画

吹田市「第２次　みどりの基本計画」における公園の役割をみると、公園緑地の適切な維持管理等の他に、「みどりを活かす」「協働していく」ことが求められています。つまり、

■公園緑地の運営管理、マネジメントをどのように考えるか
■その中で市民参画、協働をどのような形で推進するか

ということがポイントとなっていると言えます。

吹田市「第２次　みどりの基本計画」の基本理念

「自然や人のつながりを大切にする
　　豊かな心と感性を持った健やかな人」
「協働を基軸とする自律した地域社会」
「生物多様性を保全し、人と生き物が共生する自然」

□　市民と共につくり続け、市民が市民にサービスする公園づくり

堺自然ふれあいの森

行動の起点としてのプラットホーム

泉北ニュータウンの奥、南部丘陵に位置する「堺自然ふれあい公園」は“森の学校”と名付けられた「人と里山との新たな付き合いを模索する」、そして「官学民の協働」をテーマにした環境保全型の公園です。

公園のマネジメントをどのように考え、その中で市民参画や協働をどのような形で推進するか。そのためには議論の場、行動の起点としてのプラットホームをどのように作るのかが大切なことです。そこで、公園の計画・設計と並行して、市民委員、学識経験者、専門家、行政からなる『ふれあいの森管理運営に関する検討会』を設置し、議論をスタートしました。そのような中で、「工事中から皆で公園の管理をしよう」という意見が出てきて、市民や市職員、学生等による『ふれあいの森管理準備委員会』が発足し、公園の管理が始まりました。その後、この活動が『NPO 法人いっちんクラブ』として自立し、現在は、いっちんクラブと生物の多様性や生態環境、環境教育のプロである㈱生態計画研究所とのパートナーによる指定管理を行っています。

今では、年間延べ 2400 人の方がこの公園で樹林の管理活動、図鑑づくり等の調査研究、子どもの農作業体験や環境学習、クラフト活動など、様々なボランティア活動をされています。

このように、公園を管理するときには現場も変わりますが、組織もその時に応じて臨機応変に転換する必要があります。

大阪府営泉佐野丘陵緑地

『モノづくりからコトづくり』へ

関西国際空港の対岸の丘陵地にある大阪府直営の公園です。今までの公園は『空間』の提供、つまり『モノづくり』をテーマにしていましたが、この公園では、どのようなプログラムが行われているかという『コトづくり』をテーマとしています。

『コトづくり』をどのように展開したかというと、まず公園を二つのゾーンに分けました。リーディングエリアでは、公園づくりを先導するための基盤となる施設、例えば活動拠点となるビジターセンターや駐車場等を行政が整備しました。そしてコラボレーションエリアでは、大きな園路やトイレは運営会議の意見を聞きながら行政が整備するのですが、どのような森にするのか、どのような施設を造るのか、といったことは、公園の探索活動を通じて皆で考え、そして企業の応援を受けながら府民と行政の手づくりで整備を行いました。

そして現在、コラボレーションエリアでは、府民を対象としたボランティア講座やパークマネジメント講座の修了生を組織化した『パーククラブ』の方々が、様々な活動を展開しています。また、学識者、企業、行政そしてパーククラブの代表などにより運営会議が展開され、活動プログラムの支援や調整をしたり、活動内容が公園の方向性を見失ったものとならないよう、検討、調整、承認、提案等を行っています。

また、パーククラブには参加していない府民の方の、この公園でこんなことがやりたい！という思いも、運営会議で検討しながら公募型・持込型プログラム『えんづくりプログラム』として展開もしています。

年間イベント（2015 年度）

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
パーククラブ総会 タケノコ掘りイベント ヤマザクラを愛でる会	サツマイモ・里芋の苗植え お茶つみ体験 春の園内ガイド	ジャガイモ収穫会 田植え体験 サヨコリ観賞会	流しそうめん体験 昆虫観察会	開園一周年イベント	稲刈り体験 昆虫観察会	秋の郷あそびイベント キノコ収穫会 サツマイモ・里芋収穫会	つるし柿づくり 玉ねぎの苗植え 炭焼き体験	ミニ門松づくり	もちつき体験 お正月の郷あそび	野鳥観察会 ジャガイモの苗植え キノコの苗打ち体験	春の山菜・花調査 ノルディックウォーキング

このようにして、2015 年には年間 85 日の活動がおこなわれるまでになっています。そして、公園のどこでどのようなプログラムが行われているのか、どこでどのような管理作業が動いているのか、ということが載っている『コトまっぷ』を作成するなど、公園での『コトプログラム』を展開しています。

高槻市安満遺跡公園

市民が考える『公園の使い方』

高槻駅から歩いて約 10 分、阪急電車沿いの元京都大学農学部の農場の跡地に平成 31 年に一部開園予定の公園です。敷地内には弥生時代の遺跡が残っており、高槻市のシンボルとなる公園です。

この公園は、“皆で作り続けられる公園”という方針で活動しています。活動拠点となるパークセンターのような活動の受け入れのための基盤は整備しますが、それ以外はハーフメイドの広場とし、活動が展開していくごとに施設整備を行っていく、すなわち“ずっと関わり続けて、どんどん機能を向上していく”という展開論です。

市民というのは、使い方のプロフェッショナルなのです。ですから、公園を設計するにあたっては、『使い方のプロ』として市民の方に、農や自然、物づくり、交流、集い、休息、カフェ、マルシェ、読書など、この公園のどこでどんな活動をしたいかをワークショップで徹底的に話し合ってもらいました。そして、デザインのプロである設計者がその意向を空間に反映させ、公園デザインをしたのです。

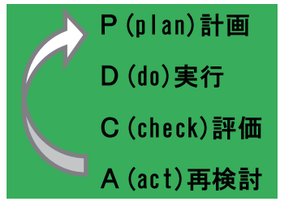
このようなワークショップを通して、市民の方々から様々な活動が出てきました。そこでプラットホームとして、市民代表、専門家、行政、学識者、企業が入った運営協議会を展開しました。このような展開の中で、市民活動団体が「あまんどクラブ」を自立させ、今では、歴史、防災、自然、プレイパーク、健康、広報、古代米、ペットといった８つのグループをつくり、開園前から様々な活動が展開されています。

□　公園を楽しく使いこなし、都市の持続的な魅力づくりのために

公園を楽しく使いこなし、都市の持続的な魅力づくりを行うためには、●**「モノづくり」ではなく『コトづくり』**をすること、また環境の世紀において、●**先人が作ってくれた公園（ストック）を有効に使いこなす**こと、●**民間＝産官学民との連携を加速化する**ことが重要なこととなります。

そのためには、**一連のシナリオ**が必要です。まず植生、気候、土壌、地盤、地形、人間がどのような関わり方を蓄積してきたのか、これらのことから**環境を読み解き、公園の方向性を議論**します。次に活動するにあたって、**目標像を共有**します。その上で、**「環境」「コミュニティ」「経済性」を考えた具体的な空間像**をつくります。環境と経済性の中にサスティナビリティがあり、いかに経営的に成立しているかは、公園といえども考えながら展開しないといけません。そして運営会議など、関係者が一堂に会して議論が出来る**「プラットホーム」な行動の起点**をつくります。最後に、必ず**アダプティブ（adaptive；適応性、順応性）にマネジメント**することです。プランを立て、実行し、それを評価して再検討する。このようなスパイラルな構造の中で活動を展開することが重要です。

緑や公園への関わり方には、ファン、サポーター、マネージャー、レンジャーなど、様々な形があります。自分の体力や時間に応じて選択性を持って参画し展開していってほしいと思います。



事例発表

「市民協働による森のようちえん」

兵庫県立甲山森林公園所長
㈱日比谷アメニス　川端　美緒氏

若い世代に公園を知ってもらいたい！

兵庫県立甲山森林公園は、六甲山系東側、甲山の麓に広がる森林公園で、約 83ha の敷地の９割以上が森林となっています。春にはサクラやツツジ、新緑、そして秋には紅葉が楽しめ、また多くの野鳥も観察できるなど、自然豊かな公園となっています。

私がこの公園の指定管理者として就任した当初に受けた印象は、”若い人が少ない”ということでした。ハイキングやバードウォッチングを楽しむ方が多くいらしているのですが、高齢者のご利用が多く、私は次の世代を担う若い世代に公園を知ってもらうことが大切なのではないかと考えました。

「森のようちえん」との出会い

そこでまず利用の傾向や来園者数を把握するために、「団体利用申込書」の提出を徹底することにしました。これにより、利用ニーズが把握できるとともに、公園で活動したい方の受付窓口が明確となり、利用促進へとつながっていきました。

その中で、「森のようちえん」という団体が公園を利用したいと言ってきたのです。北欧発祥の「森のようちえん」は、自然体験活動を基軸とした子育て・教育の総称で様々なスタイルがありますが、この団体は、ドイツの「森のようちえん」と同じく、園舎を持たずに毎日森に出かけていくスタイルで運営されていました。私自身が同じ年頃の子どものいる母親として、「森のようちえん」に興味があったということもあり、役所の担当者と協議のうえ、公園に毎日子どもが来て利用してくれるのはいいのではないかと、この団体の利用を受け付けることにしました。そのようにして、子どもたちが雨の日も風の日も雪の日も公園にやってきて、毎日子どもの声がどこかで聞かれるようになったのです。

また、この団体が「森のようちえん」の活動を広報することにより、公園の存在が若い世代に広まり、その利用拡大につながっていったのです。

WinWin の関係で公園活性化

このようにして、子連れの若い世代の利用が増えてきたので、公園としても”親子イベント”を開催することにしました。「森のようちえん」の先生に講師を依頼し、年間３回程度、０～６歳の親子の方が、森を散歩しながらのんびりとした時間を過ごし、自然に触れ親しんでもらっています。若い親世代からは、自分自身が自然とのふれあい方を知らない、という声も多く、このような自然と触れ合うイベントは大変好評をいただいています。

また、小さいお子さんから高齢者の方までが参加できる「園芸ボランティア」を開催しており、世代を超えた交流も生まれてきています。

「子育て世代を応援する公園」へ

これらの取組みにより、甲山森林公園は兵庫県における「子育て世代を応援する公園」と位置付けられました。これは、公園管理者が公園の新たな付加価値を見出したことが評価されたのだと思います。そしてこのことにより、老朽化した管理棟が授乳室や子ども用トイレ完備の木の香りがする新しい管理棟へと建替えられ、この春にオープンすることとなりました。

これからも、利用者の方のニーズを取り入れつつ、多世代のふれあいをサポートしていける公園づくりを目指していきたいと思っています。

事例発表

「公園を育てる」
～神戸市東遊園地アーバンピクニック～

一般社団法人リバブルシティイニシアティブ
代表理事アーバンピクニック事務局長　村上　豪英氏

東遊園地の可能性

私は、公園の専門家でもなければ、公園を良くすること自体にはあまり興味もありません。ただ、”公園がどうなると街が良くなるのか”、このような視点で活動を行っています。

神戸で生まれ育ち働いているのですが、６年前から「神戸モトマチ大学」という街の勉強会を開催してきました。その関係で行政の方から、「神戸の街を良くするための市民側からの提案はないか？」との話をいただきました。

そこで、私が提案したのが神戸市役所南側にある東遊園地という公園です。この公園は神戸ルミナリエの終着点として有名ですが、それ以外の時期は平日は人っ子ひとりいない公園でした。私はこの公園が、市民のアウトドアリビングになったり街歩きの拠点となったり、都心の不動産価値を上げていく拠点、そのような場所になれるのではないか、と考えました。そこでこの公園の一部に芝生とカフェを作ってみることにしました。初めは予算がなく、協賛金を集めたりいろいろな方に手伝ってもらったりして開催したのですが、カフェが出来ると昼も夜もたくさんの方が訪れて賑わいが生まれました。

その成果を市役所の方が見て、南側に広がる広いグランド全て芝生化しようと予算化してくれたのです。

公園を育てる方法

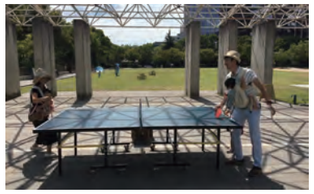
ここで大切なのは、公園にカフェやイベントがあると多くの方が来られますが、それだけで終わるならば、意味があるのだろうかということです。それよりも、その場所を自分たちで作っていくことに素晴らしさがあるのではないか。市民自身が公共空間を育てていくことで、自分たち市民としての力も育っていく、ということです。そのために行ってきた試みをいくつか紹介します。

ひとつ目は、市民の方から一人一冊の本を集めて開催した「アウトドアライブラリー」です。一人一冊というのが大事なポイントで、一冊だけというと、少しプライドをかけ十番目に好きな本とかをくださるのです。自分の思いのある本を公園に持っていくことにより、公園も本一冊分よくなります。

他には、白、青、灰色、黄色限定でＴシャツを寄付してもらい、それをチョキチョキ切ってミシンを使い、ガーラントを作りました。手間はかかるけど、市民の皆さんが公園を良くする側にちょっと関わったという体験を少しでもしてもらいたいと思いやっています。

人々がつくる風景

公園に人がいることは素敵に映ります。このような「公園に素敵な風景が生まれる」という事は常に意識しています。例えば、卓球や落書き、シャボン玉などで、本人も楽しいけれど、見ている人もすごく笑顔になれる、このようなものを風景として仕掛けていっています。



主催者になる体験

また、プログラムも市民公募で行っています。なぜかというと、いろいろな方に対して、主催者になっていただくという経験を、ハードルを下げてやっていくためです。

どのようなプログラムかというと、例えば「詩を朗読しましょう」というプログラムであったり、「楽器に触れる東遊園地」というプログラムです。「楽器‥」のプログラムとは、皆さんが楽器を持ってきてくださり、その楽器を他の方に使わせてあげてください、というだけのプログラムなのですが、これの素晴らしいところは、楽器を持ってくるだけで主催者にまわる経験が出来る、ということです。子どもには案内看板を作ってもらったり、落書きを消すボランティアを募集したり、ベンチ横の袖机を作るなど、特にプログラム等で仕掛けなくても、いろいろな方が公園を自分たちでよくする側に回ってくださっています。

リバブルシティを目指して

このように公園というのは、街全体を良くしていくためのものすごく重要なパーツなのです。公園に『コト』が集まることにより、明らかに街を良くしていくパーツになれるのです。

公園、あるいは市民生活というものは、サービスを受けるだけではなく、自分たちが何かする、ということに価値があるのではないでしょうか。

Urban Picnic の経験から
公共空間への視点

まちの全体最適をつくる主要ピース
公共空間の主役は、消費者ではない
市民が一歩前にでることの大切さ

トークセッション「公園を楽しくする『仕組み』とは？」

■コーディネーター

大阪府立大学名誉教授 / 植物工場研究センター長
増田　昇氏

■パネリスト

兵庫県立甲山森林公園所長
川端　美緒氏

一般社団法人リバブルシティイニシアティブ代表理事
村上　豪英氏

兵庫県立人と自然の博物館研究員 / 関大カフェ･オ･カフェ主催　福本　優氏
関西大学修士課程 2 回生 / 関大カフェ･オ･カフェ担当　村上　真央氏

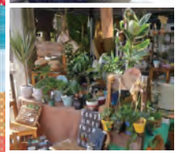
吹田市が千里南公園に“パークカフェ”を計画するにあたり、実現に向けてのアイディアコンペがありました。私たちはそのコンペに参加し、最優秀賞をいただいたのが公園に関わり始めたきっかけです。

そして実際に市民の方が公園をどのように利用しているのか、どのように考えているのかを知るために、コーヒーを淹れながら市民の方からいろいろなお話を聞いています。また、「公園で何かをしたい」という一般の方に参加いただき「関大マルシェ」として、“花と緑のフェア”に参加するなど、公園はどのような場所であるべきか？ということを探っています。

吹田山田手作り市実行委員 / リース作家
山根 佳代氏

私は生まれてからずっと吹田に住んでおり、市民目線でお話ができたらと思っています。

手づくり市の魅力は、来場者と作品の作り手が、コミュニケーションを楽しみ直接交流できることです。私はリースやインテリア雑貨などの物作りが好きで、いろいろなハンドメイドイベントや手づくり市に参加してきました。そして、このような手づくり市を地元でも開くことが出来たらと思い、神社の参道で手づくり市を立ち上げました。手づくり市を開いている参道のすぐ横には公園があり、そこの広場にもお店を並べられないかとは思ったのですが、「公園は勝手に何かをしたらだめな場所」と思いあきらめていました。しかし、花とみどりの情報センターの方と話をする機会があり、いろいろな知恵やアドバイスをいただき、今回、この広場を「手づくり体験エリア」として利用許可をいただけました。ゆくゆくはいろいろな公園で楽しい取組みができたらと思っています。



吹田市花とみどりの情報センタ総括センター長
安田 卓宏

吹田市花とみどりの情報センター（通称；はなみど）は、千里ニュータウンプラザと江坂公園の 2 か所にあり、千里は「まちのみどり」、江坂は「うちのみどり」と、それぞれの役割を分担しています。

江坂の「うちのみどり」では、市民の皆さんがみどりを楽しんでいただくためのお手伝いをする場として、講習会や展示会、園芸相談などを行っています。

千里の「まちのみどり」では、“みどりのまちづくり”をどのように進めるか、市民や大学、企業、行政の方たちと一緒に考え、情報を共有しながら、とにかく何かやってみませんか？と、いろいろな試行を行っています。例えば、関西大学の皆さんと千里南公園で一緒にカフェを開いたり、URさんと連携して千里青山台団地のコミュニティの庭である「みんなの庭」の花壇づくりのサポートをしたり、吹田市が進めている、“団地やまちの彩りを作りましょう”という「彩団地プロジェクト」にも取組んでいます。また、日建設計総合研究所とコラボして「パークマネジメントに関する評価分析」ということで、「コーヒーの値付けから公園の潜在価値を換算する」という取組みも行っています。その他、公園ってこんなことが出来るんだ、こんなことをやると素敵なんだということに気づいてもらえたらと、“花と緑のフェア”などのイベントも開催しています。

公園の使い方の「新たな視点」

増田先生：パネリストの方たちの話を聞いて、今までの公園の使い方と全然違うと思うのですが、このような「新たな視点」はどこから生まれてきたのでしょうか？

福本さん：今までは、公園とは何かをしてはいけない、市民の枠組みの外にあるもの、という認識でしたが、**「公園とは暮らしのフィールドだ」という視点**を持ち込んだところが、今までと大きく変わったところだと思います。

増田先生：公共が管理しているところだから使えない、と勝手にみんなが思い込んでしまうんですね。見えない線に支配されてしまう。公園の本当の価値にみんなが気づいておらず、空気と一緒であって当たり前なんですね。

村上（豪）さん：近くにいても公園を使っていないという方は多いと思います。公園を普段使っていない方にインタビューすると多くのことが分かるのですが、**公園に行っても何をしたらいいのかわからない、という方がたくさんいらっしゃる**のです。何もないところから自分で使い方を考えて使えるという方は、公園利用の上級者ではないでしょうか。**何をしたらよいのか分からない方のきっかけを作っていく**という視点も必要だと思います。

公園を使う「敷居を下げる」

増田先生：山根さんは、神社の参道で手づくり市をする交渉をされたのですが、なぜ横にある公園は使えないと思ったのですか？

山根さん：神社の宮司さんとは活動内容などいろいろなお話をさせていただき、どうぞ使ってくださいと協力いただいたのですが、**吹田市の公園には「〇〇公園」という立看板があり、その看板があるので使ってはいけないのだと勝手に思ってしまいました。**

増田先生：「公」とつくと、私的には使えないものだと思ってしまうのですが、**“みんなのためにこのスペースを使いたいと思う”、これが本来の「公」であります**。「公」というと敷居が高そうだと思いますが、**その敷居を下げること**が大切だと思います。甲山公園では、特定の保育園が占有的に年間200日使うということにおいて、軋轢などはありませんでしたか？

川端さん：まず、私自身の中で葛藤がありました。ただ本当に平日は公園に子供がいない状況の中で、“森のようちえん”の活動は社会的に意味のあることであること、またこの団体がNPOの団体であること、そして大人一人が見られる子供の数は決まっているのでこの団体はそんなに儲かっていないだろうということ、これらのことを考えた上で役所の方と話し合い、やってみようということになりました。

増田先生：“森のようちえん”は占有許可みたいな堅苦しい形をとっているのですか？

川端さん：いいえ、学校の遠足利用と同じ位置付けで行っています。

増田先生：利用の形は管理者の解釈の仕方でいいんでしょうね。福本さんは調査のためにカフェを出したのですが、その時に敷居みたいなものはありましたか？

福本さん：敷居は、はなみどさんが協働してくれたので超えられたのだと思います。公園で単発で何か活動をするのはまだいいのですが、連続して行う場合はその理由づけにおいてハードルを感じました。

増田先生：その辺りですね。私も公園が開園する前から市民の方々と一緒に活動していたのですが、結構ハードルが高かった。それで、**社会実験と称して活動を行い、最終的に正式プログラムとして後から設定すればよい、という方向で行いました**。村上さん、東遊園は今でも社会実験なのですか？

村上（豪）さん：まだ新しいことを試している最中なので、社会実験です。例えば今年は、楽器演奏してくれる方に私たちがお金をお支払いするのではなく投げ銭を許してもらう、また、カフェをご利用の方が優先的に座れる机を公園の一部につくる、といった取組みを実験しようと思っています。このようなことは、**営利行為ではないかと考えると公共の場では出来ないことなのですが、そこにカフェがあるので人が集まる、楽器を演奏する人がいてそれが好きな人がお金を払う、このようなことは本当にマイナスなのでしょうか。市民の方が何が嫌で何を好ましく思っているのかということは、常に見極めようと思っています**。これは行政の方にとっても大きなチャレンジであり、今までは全て駄目だったがどこまでならいいのか、という境界を一緒に探してくださっています。

増田先生：江戸時代のレクリエーションであった「物見遊山」の物見というのは、神社境内でやる“市”のことなのです。つまり、行政からの治外法権空間で寺銭をとって活動してもらう。このような形で公共的な空間を担保していたのですが、そういう意味では寺銭をとることによりある一定の自由活動を担保、継続できるといった仕組みが必要なのではないかと思います。

公園での「コトづくり」やプログラムの価値

増田先生：先ほど非常に面白いと思ったのですが、「公園の価値はコーヒー一杯の価値に置き換えることが出来る」というのは、どういうことですか？

安田さん：千里南公園でやっている「花と緑のフェア」で、普段一杯２００円のコーヒーに対して、「あなたはこのコーヒーに今日だったらいくら払いますか？」というアンケートをとりました。するとイベントをやっている時には少し上がるんですね。**普段の公園といつもと違う特別な空間を提供している公園とでは気持ちの中で差があり、それが僅かではあるが価値となってくる**のです。

増田先生：そういう発想はとても大事で、基調講演でも話しましたが**“持続性”というのは経営と環境との重なった属性に存在し、この経営という視点がないと持続しない**のです。
私は農業政策に携わってきたのですが、マルシェのようなものから農業改革が起こると思っています。なぜかというと、**生産者と消費者がつながる、だれが自分の野菜を食べて喜んでくれるか直接見えるようになるのがマルシェ**なのです。また同時に、農家の方自身が値付けができるということが農家のモチベーションとなるのです。例えば200円なら売れるが300円では売れず、200円に価格が決まってくる。このようなことが本当の意味での公共サービスとはどのぐらいの値段な

のか？という所に落ち着いていくと思います。山根さんの手づくり市では、場所と関連して値段をつけるということはあるのですか？

山根さん：場所と関連してではなく、テントの大きさで価格は決まっています。

増田先生：現在ではどこで値段をつけているのか、どこで流通しているのかといったことはブラックボックス化して見えません。これを見えるようにするのがマルシェや市であり、そのような場所を提供できるのが公の空間なのです。その辺りに公園の持つ大きな意味があるのかと思います。
ところが公の場である公園では、農業体験をやって作物を作っても、参加者はその作物を持って帰れないのです。公園の中で作ったものは法律上市の財産なので、持って帰るには、市に財産放棄をしてもらわなくてはならないのです。そのようなややこしい話が出てくるのですが、楽器演奏をして投げ銭をするというのは、商行為なのか？パフォーマンスの一部なのか？このことは超えていけそうですか?

村上（豪）さん：商行為が目的なのとコミュニケーションが目的なのとの線引きは、とても難しいものです。コミュニケーションを大切にしている場にお金が介在する、これが公園で駄目かというとそうではないと思います。しかし、それがいいのならば何でも許されるという消費者の概念を公園に持ち込むのはいかがなものかとも思います。

増田先生：有料プログラムの値付けに、どのように公共性を持たせるか、これについてどうお考えですか？

安田さん：私たちも有料の講習会を行っており、公共の場で有料サービスを提供する、という点では公園と同じです。**きちんと開けた場所で透明性を持って行うのであれば、そんなに難しいことではないのではないでしょうか**。

福本さん：値段とは、ユーザーすなわち買う側にとって非常に意味があることだと思います。僕たちのコーヒーを200円で買ってくれるユーザーが公園に求めていることは何か？調査をしている中で、コーヒーそのものより、若い学生とコミュニケーションをとることに価値を求めている、そのように感じられました。**公共の場である公園で、だれがその行為の価値を決めるのか、という所がすごく大事なのではないか**と思います。

村上（真）さん：良く来てくれる人は私たちとしゃべるのが目的で、休んだ時に「楽しみにしていたのに何でいなかったの？」とおっしゃってくれたり、公園以外でお会いしてもあいさつもらえたりすると大変うれしく思います。このように公園で良い風景をうみだすことにコーヒーは貢献できているのではないかと考えます。

増田先生：都市生活や都市政策の悲しいところは、顔見知りがいないことやコミュニケーション不足に陥ることです。コーヒーやイベントがインターフェースとなりコミュニケーションにつながっていく、そこにどのようにお金が介在するかは大きな話ではなく、お金は活動をどのように持続させるかという話の中で展開していけばいいのです。
山根さんの手づくり市は、コミュニケーションという視点から、社会的カウンセラーという役割をされているのでしょうか？

山根さん：そこまで考えているわけではないのですが、お年寄りの方はもちろん多くの方が来られてたくさん話をされて帰られるので、そのようなことは出来ているのではないかと思います。

増田先生：手づくり市では物を売るだけでなく、パフォーマンスや座談会等、「コト」を売るようなメンバーの参加や連携等はありますか？

山根さん：吹田市ではハンドメイド活動をされている方は大変多く抽選となるのですが、パフォーマンスをされる方はなかなかおらず、どう探したらいいのかもわからず困っている状況です。

増田先生：パフォーマーを引っ張り出してくるいいアイディアはないでしょうか？

村上（豪）さん：パフォーマンスをされる方同士のネットワークはかなり密接にあるので、まずは一人の方にその「場」のファンになっていただき、そこから繋がっていくのが良いと思います。そうはいっても主催者側がお支払いできる金額には限りがあるので、投げ銭が公に許してもらえる状況が出来れば、かなり追い風になると思います。

増田先生：そうですね。そこら辺を参考にしていただければと思います。マルシェなどのように、**「モノ」と「コミュニケーション」の両方の展開があると、より面白いものになる**と思います。

活動の担い手

増田先生：ここからは「担い手」について議論をしたいと思います。**活動主体をどのように発掘し育てていったらよいのか、あるいは地域の主体をどのように考えたらよいと思いますか**？パークカフェをやってみて、連携先のようなものは出来ましたか？

福本さん：地域の人に、**“公園は使える場所”ということを知ってもらう必要がある**と思います。例えば手づくり市やマルシェをみて、私もやりたいとか、地域や子どものためにやっている市民活動を屋外でもできる、ということを知ってもらう。**まずは経験者を増やしていくことが必要なのではないか**と思います。
月に２回のパークカフェでの連携先は増えていませんが、マルシェをやらしていただいた時には８～９組の公園で表現をしたいという方がいらっしゃったので、次年度はそういった方が何かできる枠組みはないかと考えています。

「食」や「農」との連携

増田先生：地元の農産物等を作られている農家との連携に展開していかないかと思うのですが。

福本さん：農家さんではないけれど、ポリシーを持った八百屋さんが出来たりしているので、そのような方をとおして、生産者や生産者を大切にする仲介者などと出会えないかと考えています。

増田先生：花とみどりの情報センターでは「まちのみどり」で、農業との連携に展開していくことはあるのでしょうか？

安田さん：イベントでは北摂地域で有機野菜を扱っているお店など、こだわりを持っている方に来てもらっています。そこから実際の生産者の方に広がっていったらよいなと考えている最中です。

増田先生：都市農業や農のある暮らしなど、緑と連携ある暮らしの一つのパターンとして、「食」や「農」の可能性をぜひ探っていただきたいと思います。

公園を「おしゃれに広報」する

川端さん：今回いらっしゃるパネリストの方で共通しているのは、広報がおしゃれだということだと思います。**今までの公園は、ダサいとか少し古臭いと言ったイメージが私にはあるのですが、若い層に来ていただくには広報はとても大切なことだと思います**。

増田先生：次の展開をしていくにあたって、**イメージ媒体は非常に重要**だと思います。東遊園はおしゃれに展開していますが、やはりデザイナーズ集団みたいなのはいらっしゃるのですか？

村上（豪）さん：カメラマンの方にはしっかりとついていただいています。また、出店する方は皆一生懸命SNSを使って広報をされるんです。なので、**その場に主体的に関わっている方が多くなれば、必然的に今のSNSが主流の広報にとってプラスなのではないかと思います**。

増田先生：福本さんの提案書も非常におしゃれですが、これはやはり建築系だからですか？

福本さん：やはりこれは建築学科の課題ということで、このようにおしゃれなのだと思います。**学生は吹田市民ではないのですが、学生が本気を出してつくることで吹田に愛着もつくし、読み手も読みやすくなる**。このようなメディアのおしゃれさというのは、非常に大切だと思います。

パネリストの公園に想うこと

増田先生：「食」に大きな意味があるということ、また、都市の中で欠如している**「コミュニケーション」が大切なインターフェース**になるということ、そして**「おしゃれさ」も大切**だ、という議論が出てきたと思います。
そろそろまとめに入ろうと思います。皆さんから「公園をもっと楽しくする仕組みづくり」に対してのご提案や呼びかけなどありましたら、お願いします。

村上（豪）さん：私は公園で起こることを企画しているのですが、公園にはたくさんの方がいらっしゃり、利用者間のトラブルだけでなく、自分たちに既得権があるような錯覚だとか自分たちが全てをコントロールしているような錯覚に陥るなど、さまざまな問題が出てきます。**民間あるいは市民がやることなら全て良いという訳でなく、市民がやるからこそ、本当の「公」に向かって進んでいるのか、というチェックが働く仕組みというのをシビアに作らないといけない**と感じています。

増田先生：行政の方には、「公」を担保する組織として、ある一定の「公」の担い手としての役割をぜひとも持っていただきたいと思います。

川端さん：いろいろな方のお話を聞いて、もっとチャレンジしないといけないなと思うのと同時に、それが社会貢献できる内容であるというのが重要だと思いました。

山根さん：吹田には大きな公園だけでなく、小さな公園も多くあります。手入れがあまりされてなく人気がなく少し物騒な、そのような公園にも目を向けて、青空ヨガであるとか焼き芋大会などをやって、**公園の大小にかかわらず、楽しい公園になったらよいな**と思います。

増田先生：公園や緑道というのは、「痴漢注意！」のような看板だらけになる可能性があります。「モノ」で対処しようとすると、防犯カメラや外灯を設置する、という話になりますが、そうではなくて、ひと気があるということが大事であり、人が使っている場ではそのようなことは発生しません。いかに皆が使いこなすかという視点を意識してもらえたらと思います。

村上（真）さん：千里南公園に新しくカフェが出来るということを知らない方も結構いらっしゃるので、**ここにそういうものが出来るんだ、ということが想像出来るようなものがあれば、皆がもっと考えていくきっかけになるのではないか**と感じました。

増田先生：今までは高齢者の方がサービスの担い手でしたが、これからの高齢化社会が進むにつれ、高齢者がサービスを受ける側に回らざるを得なくなります。その時**学生の方が地域へ愛着を持ち、そこで活動することは非常に重要なことだ**と思うので、これからもぜひこのような関わりの輪を広げていっていただけたらと思います。

福本さん：いろいろなことが混ざって共存できる場所、というのが公園のすごくいい特徴だと思います。**共存できる仕組みづくりをそれぞれのプレイヤーが考え、“混ざる”ということを大事にしていくということが「公園を楽しくする仕組み」での重要なパーツ**だと思いました。

安田さん：花とみどりの情報センターがやっていることはそれほど難しいことではなく、また積極的に働きかけをしていろいろなプロジェクトを動かしているのでもありません。来たものを拒まず受け入れ、一緒に考えてやってみる。まさに小さな成功体験を積み重ねることで何かが転がっていくのではないかと考えています。しかし、これらを進める中でもいろいろなハードルがあり、そのハードルを越えるためのルール作りやチェック体制などを構築することは、行政の立場として担わなければならないことです。**使いたい人と行政が一緒になって考えていけば、意外とゴールは近いのではないか**、と感じています。

まとめ

増田先生：公園とは我々の専門分野で言うと“オープンスペース”です。オープンスペースとは建物の中ではないという“オープンエア”という視点と、分け隔てなく使える柔軟性を持った“オープンマインド”という視点からなっています。このオープンマインドを持った空間であるオープンスペースのことを、“公共スペース”と呼び変えたことにより、見えない敷居がぐっと高くなってしまう可能性があります。**「本来公園とは、オープンマインドでありオープンスペースである」この原則論を皆の共通認識にすることにより、敷居はかなり下がるのではないでしょうか**。
　次に、「行政」という組織と「市民」という組織をダイレクトにつなぐのは難しいものです。そこで、**指定管理者制度や情報センターといった「中間媒体」を介在させることにより、行政にも市民にも物を言えるようになります。このような中間媒体を育てることにより、公園の利用活性化につながる**のではないでしょうか。
　また、「協働」や「共生」についてですが、本来の「共生」という言葉の意味は何なのか。お互い機能が違い、そして違う役割をもった人たちが協働することを「共生」と言うのです。行政の方が一緒に市民活動をしようとすると、一緒に掃除をして一緒に汗をかこうとするのですが、これは違います。市民活動を受け入れる仕組みをどのように作ったらよいのか、有料プログラムを許可するにはどうすればいいのか、このようなことを考えていただきたい。**市民と行政は機能が違うのだということを認識し、どのように多様性を保有して共生形態を作っていくのかということを考えるのが行政の役割**であります。
　最後に、このような課題を一気に解決しようとするのではなく、小さな社会実験という名のチャレンジをしながら**小さな成功事例を積み上げ、そして新たな枠組みや仕組みを皆で築いていく**、そういう方向へとつながっていければと思います。
　吹田市は、非常にポテンシャルの高い地域であり、多様な担い手の方々がいらっしゃいます。今日のシンポジウムを皆さんが行動されるひとつのきっかけになればと思います。

パネル展示 Panel exhibition

パネル展示会場風景

みんなのみどりのまちづくり展示

吹田市花とみどりの情報センターの役割の一つ
＿みどりのまちづくり実践型シンクタンク＿
の取り組みとして、
市民・企業・大学などと連携した
様々な「みどりのまちづくりプロジェクト」
をご紹介しました。
小さいけれどもピリッと楽しくて
新しいアイデアの詰まった“コト”が、
吹田の公園やまちかどではじまっています。

■みんなのみどりの活動団体紹介

- すいたの公園活動まっぷ
  （SELF みどり組、山田手作り市ほか）
- パークマネジメントに関する評価分析
  （株式会社日建設計総合研究所）
- 「カフェ・オ・カフェ」屋台展示
  （関西大学住環境デザイン研究所）
- 吹田青山台団地「みんなの庭」
  （UR 都市機構）
- 公園管理運営の活動紹介
  （株式会社日比谷アメニス）
- 吹田市「彩団地プロジェクト」紹介

**■公園をもっと素敵に！
みんなで育てるメッセージツリー**

あいさつ Message

吹田市長　後藤 圭二

皆さんは吹田の公園をよく利用されますか？気候のいい時季には訪れても、真夏や真冬、夜は足が遠のくのではないでしょうか。せっかくすばらしい公園があるのに利用する時間が限られるのはもったいない、もっと楽しんでほしいとの思いで、千里南公園にパークカフェをつくることを決めました。来年２月にオープンします。市の公園ですが、店舗は民間会社が手掛けます。パリのようなおしゃれなカフェでごはんを食べたりワインを飲んだりしながら、時間を気にせず季節折々の公園の風景を満喫する。これが、「365 日公園を楽しむ」ことにつながると思っています。

ほかにも、吹田の公園に新たな手法を取り入れたいと考えています。パークマネジメントです。行政が公園を管理運営すると、どうしてもその使い方にブレーキをかけがちになります。しかし、ハード面の管理は行政、運営面は地域の方々など行政以外の組織、と役割を分担することで、公園利用に柔軟性を持たせ、よりいきいきとした空間にする。そのような仕組みを吹田から広めたいと思っています。

私は、本気で環境やみどりの政策に取り組みたいと思っています。そのためには、市民の皆様のお力が必要です。今回、このシンポジウムで「公園をもっと楽しくする仕組みづくり」について、実践されている先生方からアドバイスをいただき、私も皆様と勉強させていただきたいと思います。

「パークカフェ」イメージ図

【　千里南公園パークカフェ アイデアコンペ　最優秀案　/　関西大学住環境デザイン研究室】

育てよう!メッセージツリー!

みなさんが公園でやってみたいこと、疑問に思っていること、困っていることを
およそ 100 の「かみはっぱ」に書いていただきました。
そのいくつかのメッセージをご紹介します。

遊具について -26 のメッセージ
- ひみつ基地があったらいいな
- 大きい滑り台が欲しい
- 遊具をいっぱい、鉄棒をいっぱいいっぱい遊べる楽しい公園に
- 大きなアスレチックがほしい
- もっと遊び場を増やしてほしい
- パンダがいて欲しい
- ターザンロープしたい
- ブランコが欲しい

アメニティについて -9 つのメッセージ
- 外でお昼を食べるときに日影があるといいなと思います。
- きれいなトイレが欲しい☆
- ベンチもっと増やして大人も楽しめる公園に！

使い方について -7 つのメッセージ
- こうえんでピクニックがしたい。
- 公園がだれでも使え、自分の好きなことを実現できる場所に！！
- ごはんを食べて、ひるねをして、お花のかんむりを作りたい♥

スポーツ・運動について -6 つのメッセージ
- バスケットボールのリングを置いてほしい
- 野球がしたい！
- 運動会がしたいです

イベントについて -7 つのメッセージ
- 子供にもアレンジメントや寄せ植えやお花や緑にふれあうように「緑育」したいです
- 公園の花壇で花植え会みたいなの（自由参加）などあれば嬉しいです
- サイズアウトした子供服の交換会・フリーマーケットなどできたらしたいです
- バードウォッチング＆虫取り等のイベント

こんな公園あったらいいな -18 のメッセージ
- 遊園地みたいな公園があるといいな
- おにごっこせんようの公園があったらいいな
- 遊びのリーダーがいる公園があったらいいな♥
- 芝生で素足で遊べるように！
- 公園で子供と一緒に芝生で寝転びたい
- きのぼりしたいな
- 手足をつけられる水場があるとうれしいな～♥公園大好きです
- 公園内に大人も子供も飲食できる手ごろなカフェをいっぱい作って下さい
- 私が好きな食べ物を売っている公園が欲しい

安全・安心について -6 つのメッセージ
- 外から見て分りやすい開けた公園を！明るい笑顔は公園から！
- 子供たちがたくさん体を動かして安全に遊べる公園が良い！
- きれいで安全な公園が増えて欲しい

動物やペットについて -8 つのメッセージ
- わたしがすきなどうぶつがいるこうえんがほしい
- パンダと一緒に滑り台ができる公園がいいです
- 犬と一緒に遊ぶスペースが欲しい
- リスとっしょに遊びたい

みどりや環境について -9 つのメッセージ
- 美しい花の街に。みんなが楽しい街に
- 花のあるきれいな公園にしてほしい
- 木にブドウがぶら下がってたらいいな

うちのみどり、まちのみどり

「はなみど」は、南千里駅前の千里ニュータウンと、江坂駅前の江坂公園内の 2 カ所に拠点があります。
「花とみどりの魅力を市民に伝え、花とみどりで市民をつなぎ、花とみどりにあふれた生活とまちづくりを実現する」ために、各施設でまち（街）と、うち（家）のみどりの役割分担を行っています。

はなみど

はなとみどりの情報センター

まちのみどり担当 千里情報センター

阪急南千里駅前　千里ニュータウンプラザ 1 F

〒565-0862 吹田市津雲台 1-2-1
〔TEL〕06-6155-1987〔FAX〕06-6831-5087
〔開館時間〕10:00〜18:00
〔休館日〕毎週月曜日、祝日、年末年始
※祝日が月曜日のときはその翌日も休館

うちのみどり担当 江坂情報センター

北大阪急行江坂駅東　江坂公園内

〒564-0064 吹田市江坂町 1-19-1
〔TEL〕06-6384-3987〔FAX〕06-6384-0024
〔開館時間〕10:00〜18:00
〔休館日〕毎週月曜日、木曜日、祝日、年末年始
※祝日が月曜日、木曜日のときはその翌日も休館

ホームページ http://www.suitahanamido.com/

吹田市みどりのまちづくりシンポジウム　2018.7月発行
発行：吹田市花とみどりの情報センター　指定管理者：株式会社日比谷アメニス